

いま、「文学」を読むことに就いての断想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部文芸研究会 公開日: 2017-08-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18825

いま、「文学」を読むことに就いての断想

宮 越 勉

一、いま、「文学」は読まれているのか

最近の通勤、通学の電車内の光景として、乗客の大半はスマホに眼が向かい、文庫本などを読んでいる私などはごく少数派になってしまった。日々過酷な労働を強いられている勤労社会人が「文学」離れを起こしているのは時代の趨勢でどうしようもないことだと思う。問題は、理科系や社会科学系の学生は度外視しても、最近の文学部日本文学専攻の学生たちは果たして「文学」を読んでいるかどうかであり、ここからこのエッセイを始めたい。

二〇一三年度、私は「日本文学史A」（前期履修科目、受講生一六〇名）の定期試験の一部として、日本近代文

学史で有名な文学作品の書き出し部分を一〇箇所示し、その作品名を答えなさいという二〇点分ものを出題した。大学入学前の学生たちの読書量を見る意図があった。試験に至るまでの一五回の授業で若干触れたものもあったが、採点の結果は惨憺たるものであった。夏目漱石の「草枕」、森鷗外の「山椒大夫」、志賀直哉の「和解」、川端康成の「伊豆の踊子」、三島由紀夫の「仮面の告白」などでは若干の正解があったが、尾崎紅葉の「金色夜叉」と田山花袋の「田舎教師」は正解者ゼロだったのである。おそらく、受験勉強は論説文などの過去問をいかにして正解を導くかが主であつたらうし、近代小説などの「文学」を耽読しては志望校に合格するのは難しく、この結果は私自身ある程度予測していた。この「日本文学

史A」では、定期試験とは別に森鷗外の「舞姫」に関する簡単なレポートも課していて、五月末までに提出させていた。高校時代に授業で「舞姫」（高校現代文教科書の定番文学教材の一つ）を学習した学生はどのくらいいるかと調査したところ三分の一ほどであり、これもほぼ予測通りであったが、レポートのなかに僅か数名、豊太郎の母は諫死したのか自然死だったのかという問題に踏み込んだものがあり、この点では満足するものがあった。逆に、この授業体験とは別に、驚いたのは、数年前の「基礎演習」で「舞姫」を扱った際、授業を終えて或る学生が「先生、石炭はどのように作るのですか」という質問があったことである。このように、大学に入学して間もない学生たちが日本の近代「文学」にいかにか接していないかは明白であったが、とって若い作家たちの現代文学を多読していることは「基礎演習」の最初の授業の自己紹介などで十分認識していたので、「文学」好きが多く入学して来るだろう日本文学専攻の新入生に「文学」離れない、としていいのである。

さて、大学四年生になると、必修科目の「卒業論文」がある。私は毎年、卒論コンパをしているが、今はクロージングした「アミ」という店の二階を貸し切ったもの（二

〇〇四年度、卒論ゼミ学生は四五名）は盛況で、最近はこの老教師と話しても話が合わないと思うのか、強制的ではないので参加者は少なくなっているが、こと文学談に及ぶや自発的にドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」などを読んでいる学生もいて、やはり文学部の学生らしくなって卒業していくのだなあと感じたのである。「卒業論文」の研究対象作家で多いのは誰か。先日、すでに定年退職されているT先生（文芸と日文の卒論を兼担されていた）にそれを尋ねたところ、漱石、村上春樹、宮沢賢治、太宰治、芥川龍之介の順で最多上位5とということであった。私の場合これまでのところ、一、二、三、四年次の「日本文学演習」で扱う作家作品が太宰、芥川、賢治が多いせいいか、これが最多上位3で、水をあけられて漱石、谷崎潤一郎で最多上位5という具合になっている。なかに、子供の頃からよく読んで来たといひ、山本有三、新美南吉、野上弥生子らを扱う卒論があり、特殊なケースと思うが、澁澤龍彦の短篇小説、沢木耕太郎の「深夜特急」、武田泰淳の「富士」、深沢七郎の「楢山節考」と「東京のプリンスたち」、小川未明の「赤い蠟燭」と人魚、福永武彦の「死の島」、庄野潤三の「静物」、山村暮鳥の「聖三稜玻璃」などを扱った卒論があった。

つまり、日本文学専攻の学生は在学中に「文学」を読み、決して「文学」離れなどはしておらず、それなりの精神的成長をして卒業していつているのだ、と感じているのである。

では、今から五〇年ほど遡って、私の高校生、大学生時代は「文学」は読まれていたのだろうか。私は高校時代（青森のA高校）、高校一年次の最初の八ヶ月ほどを父親の勤務の関係から、A市に下宿生活をした経験がある。生意気にもシヨロホフの「静かなドン」を読み始めていたら、同じ下宿の少し生意気なK君（二年次に応援団長になった）が翻訳で「文学」は読んで駄目だ、訳者の文学センスに左右される、と言いつ出したのである。なるほどと思い、「静かなドン」は途中で読むのをやめた。私の高校時代は、猛練習で名高い伝統あるボート部に入っていたこともあり、日本近代「文学」の武者小路実篤、太宰、川端などの一部の作品を僅かな余暇に読んでいたくらいのものであった。我々団塊の世代は、受験戦争が激しく、ここには書けない私の家庭の事情もあって私は二浪し、R大学文学部日本文学科に入学、サークル活動には参加せず、翻訳では駄目だと承知していたものの、カフカの「変身」、カミュの「異邦人」、チェーホ

フの「桜の園」、シュニッツラーの「輪舞」など海外「文学」も読み、やはり日本文学の近現代「文学」（古典も読んだが少なく「伊勢物語」や「大和物語」を好んだものだった）の数々を貪るように読んでいたのであった。高校時代の同級生（軟式野球部）でH大学の経済学部に入っていたM君は経済学の話は殆どせず、彼から田宮虎彦の「別れて生きる時も」、そして伊藤整の「典子の生き方」を読んだ、よかったぞ、お前（宮越）は読んだかと言われ、私は読んでおらず、では読まねばならぬとして読んだものだった。W大学の英文に進学していたK君（先のK君とは別人物、高校時代は陸上部）は「文学」に関心は薄く、ひたすらチョムスキーの話をし、音楽、それもジャズに夢中だった。R大学の友人ではH君（Y県出身の小金持ちの子息）が日本近代「文学」を多読していて、彼の下宿に泊まっては「文学」談義、大学院進学を互いに目指していたので「文学」研究の話が次第に多くなっていたのだった。では、その他の学生はどうかと言えば、R大学のもう一人の親友S君（某地方テレビ局に就職した）とはテレビ番組の話題が中心で、彼の「文学」の読書量はまあまあのもので（当時の現代文学と違っていい石坂洋次郎、石川達三、三島、安部公房、遠藤周作、大

江健三郎、水上勉、五木寛之などはほどほどに読んでいた)、今も昔も日本文学専攻の学生といっても、このS君(もともと今の学生はテレビは殆ど見ないが)が一般的なものだったように思え、「文学」離れはなかった、と思うのである。

先に今時の日本文学専攻の学生は現代文学はよく読んでいと書いた。ならば、私はどうなのか。正直、殆ど読まなくなっている。なぜなら、「文学」で最も重要と思われる感動を覚えなくなってしまったからである。が、二〇一六年は、日文の特別招聘教授のH先生の関係から本屋大賞第1位の宮下奈都の『羊と鋼の森』(文藝春秋、二〇一五、二〇一六年ベストセラー七位)と、院生たちとの夏の校内合宿として読書会で組上にした三島賞受賞の蓮實重彦の『伯爵夫人』(新潮社、二〇一六)とを読んだ。前者は、院の授業でのことだが、若い院生たちには現代の若者の傷つきたくない気持ちなどがよく描かれているとして概ね好評だったものの、私には主人公の外村という青年とその関係者が繰り広げる筋の展開がアニメ風であり、綺麗事で終始した観があった、感動する点は殆どなかったのである。後者は、八〇歳という高齢にも関わらず文学者(蓮實氏は高名なフランス文学研究者、

文芸・映画評論家である)はやはり創作をしたいもので、それを実践していることに私は敬意の念を覚え、読書会の対象作品として私のリクエストが通ったものであったが、多読多識のこの作者ならこれ位のレベルの小説は書けるが所詮絵空事と思え、ポルノ的な描写部分も何らリアリティが感じられず、名作とか傑作などと呼ぶには程遠いように感じられたのである。ただ、院生の一人が休憩時間に図書館に行き選評や作者の言葉が掲載されたものをコピーして来て参加者全員に配布しこの読書会の後半に入って、読書会の前半で私が作中の蓬子にはモデルがあるのではないか、それに生き生き描かれていると発言していたのだが、それが見事的中、蓮實氏はフランスで知り合った一五歳の少女がどうも蓬子に似ている、モデルだとしている部分を読み、私の拙い読みも満更でないと思し自己満足に浸ったのであった。

二、「文学」の変容について

どうやら私は、極めて質の高い純文学しか受け付けなくなっているようだ。大衆文学、エンタメ系のものは、映画化やテレビドラマ化したもので楽しめばいいと思う

ようになっていた。私が大学院生の頃、渋谷をぶらついていて、野村芳太郎監督の「砂の器」(一九七四)を観る映画館で観た。感動した。丹波哲郎や加藤剛もいいが、緒形拳と加藤嘉の演技が出色、チョイ役で出演の笠智衆と渥美清も実によかった、そして芥川也寸志らの音楽がいい。ラスト三〇分ほどは胸が「じゅん」としていて、映画館を出てもその感動の余韻が暫し続いたのを記憶している。それまで松本清張作品は「点と線」や「ゼロの焦点」、「張込み」などの短篇は読んでいたが、「砂の器」は読んでおらず、早速その新潮文庫二冊を読んだのであった。が、殺人が多すぎる、登場人物が多すぎる、原作をシンプルにした映画の「砂の器」(脚本は橋本忍・山田洋次)の方がむしろ優れていると感じたのだった。その後、「砂の器」は何度かテレビドラマ化されたが、野村芳太郎監督の映画作品を凌駕するものはなかったと思う。「砂の器」に関連して、出久根達郎の「類いなき物語作者」(『志賀直哉展』(世田谷文学館、二〇〇一)所収の文学エッセイ)では、清張の傑作「砂の器」は志賀の「赤西蠣太」がヒントになって生まれたのではないか、と指摘している。それは内容ではなく、「赤西蠣太」に蠣太の「言葉訛」が仙台訛とは異なり、秋田辺だろうと

人は思っていたが実は雲州松江の生まれだという一節があり、「砂の器」の重要な設定になったのではないかとしているのである。この説は当たっているように思える。それはともかく、中学生の頃からテレビ大好き人間になった私は、最近のテレビ番組は面白くないと感じているが、「ごくせん」とか「半沢直樹」とか「ドクターX」外科医・大門未知子」は興味深く観たものである。原作は漫画やエンタメ系小説などのようなのだが、これらも「文学」としての「文学」として肯定的に受け止めたいたい思っている。

ここまでは、「文学」といっても小説の類いを指していたようだ。が、「文学」には詩歌もある。私は、明治大学大学院に進学し、恩師本多秋五先生の定年退職後は、法学部所属だが大学院日文兼担となった詩人の大岡信先生が私の指導教員になられた。或る時の授業で大岡先生は「純粹詩の時代はもう終わっている。詩人の才能のある者は音楽(ニューミュージック、シンガーソングライターだろう)の方に行っているのではないか」といった意味のことを言われたのが今も鮮明に記憶に残っている。一九八〇年頃のことである。私は学生時代から詩も好き

で、島崎藤村（「小諸なる古城のほとり」が一番いいと思う）、高村光太郎（「秋の祈」がいい）、萩原朔太郎（「漂泊者の歌」を一番好む）、中原中也（「一つのメルヘン」がいい）、新しいところでは谷川俊太郎、吉野弘、茨木のり子などを好んで読んでいて、短歌では石川啄木（暗誦している歌が多い）、斎藤茂吉、新しいところでは寺山修司を好んでいたのだが、それよりもステレオを購入し、井上陽水の「傘がない」（一九七二）や「心もよう」（一九七三）をFM放送で聴いた時の衝撃は凄まじいものがあり、松任谷（荒井）由実の「卒業写真」（一九七五、ハイ・ファイ・セットの山本潤子が歌うのがいい）や「中央フリーウェイ」（一九七六）などにも一種の感動を覚えていたのだった。

二〇一六年のノーベル文学賞はボブ・ディランであった。テレビのニュースで聞いて一瞬わが耳を疑ったものだが、湯浅学『ボブ・ディランロックの精霊』（岩波新書、二〇一三）を読むと、「曲作りはまず詞作から始まる。ボブの場合、言葉のないところから曲は生まれない。突然湧いてくる」という一節があり、ノーベルは詩作もした人であり、ボブ・ディランは詩人としてノーベル賞に値するとされたのだらうと思った。ただ、湯浅氏の本に

は書いていないようだが、テレビ（NHK）のニュースでは詞の途中でも韻が踏まれているとしていた。だから、ボブ・ディラン理解のためには日本語に翻訳された歌詞では駄目で、英語の歌詞で迫るしかないと思っている。

三、「文学」の読みは更新される

私は、中学生の頃から大晦日の夜はテレビでNHKの紅白歌合戦を見て過ごしている。かなり以前から面白味がなくなっているが、歴代最高視聴率が何と八一・四％という一九六三年の紅白を再放送した時があって、それをビデオテープに撮っておいたほどで、改めて観ても大変よかった。そのような事情から、太田省一『紅白歌合戦と日本人』（筑摩書房、二〇一三）を実に興味深く読むことが出来た。作詞永六輔、作曲中村八大、歌唱坂本九の「上を向いて歩こう」（一九六一）は日本歌謡曲史上の名曲中の名曲と思っているが、この著者によれば、作詞者の永六輔の六〇年安保闘争の挫折とその後の深い孤独が表されている（注記でこの説を出したのは佐藤剛として）ものだったが、二〇一一年の紅白では松田

聖子と神田沙也加が「上を向いて歩こう」を歌い、この時は東日本大震災で多くの傷ついた日本人に希望を与える歌となっていた、というのである。時代の推移とともに流行歌とはいえ後世に残る名曲はその意味、解釈がいれば更新されるのだ、ということになる。「文学」研究も然り。先行研究を踏まえたい研究論文は研究とはいえず、文学エッセイというべきものに過ぎない。といって、文学エッセイが駄目といっているのではない。先の出久根達郎のものは決して「独り合点」ではなく、「文学」研究に一石を投じたものと私には思われたのである。

四、私の志賀直哉「雨蛙」論・補説、

および今後の課題

日本近代文学研究者のプライドから言うわけではないが、「上を向いて歩こう」のいわば上書き解釈、受容より数段「文学」の読みをめぐる問題は難しいものがある。抽象的なことを書いても意味がない。そこで、最近私は志賀直哉の「雨蛙」という作品についての長大論文を発表した(『文芸研究』第百三十号、二〇一六・九)ので、それを巡って具体的な「文学」の読みの問題、更新につ

いて綴っていかうと思う。

志賀直哉の「雨蛙」は新潮文庫で一七頁分の短篇なのですぐ読めてしまう。が、志賀はこの短篇の完成までに実に苦勞し、一年半ほどの時間を費やしたのである。「雨蛙」は小説の種類でいえば、志賀を高く評価せしめている私小説や心境小説とは異なり、「捲え物」、いわば物語的小説といえるものである。が、リアリティがなければならぬ。当然、その舞台設定と時代設定を探究することから研究を始めた。小説家はその作品の書き出し部分に大変苦心するものである。その冒頭の一文は「A市から北へ三里、Hと云ふ小さな町がある」というもので、このあとそのHという町の説明が比較的長く綴られ、簡潔な文体で知られる志賀にしては異例の作の印象を与えている。が、先行研究では「A市」はどこで「Hと云ふ小さな町」はどこか、誰も触れていないのだ。私はこの十数年来これを頭の中で折りに触れてはどこだろうと考えて来た。まず「A市」はどこかの探索に取り掛かった。小説の後半に「新潟の医専」と出て来るので、これは架空のものではありえず、どこか新潟に近い或る市かと最初は考えた。ところが、作中に「冬の霜解」などがあることから、雪国ではないと見た。そして明石市に相

違ないと思うようになった。「A市」には有名な文学者による講演会が出来るような「市の公会堂」がある。かつて漱石がこの明石市の中崎の公会堂で講演をしたことがあるのだ。また、明石市に女子師範学校があつて音楽教育が活発だつたこと、メリヤス工場が建設予定中であつたことから、「A市」は明石市だとほぼ断定できたのである。論文発表後の現在、補説として、作中の「昔藩主の別邸だつた清々園といふ料理茶屋」とは「中崎にある旧藩主の別邸（御茶屋）」（黒田義隆『明石市史 下巻』）が相当するのではないかと思つている。で次に、「Hと云ふ小さな町」は、どこかが問題となつた。今の地図帳に目を凝らし、榎谷町だろうとなつたが、明治四一年には四百戸ほどはあり、作中に「百戸余りの家」からなるとあることから、榎谷町には幾つかの集落があり、そのうちの「福谷」という集落が「Hと云ふ小さな町」に当たるのだろうと突き止めて行つた。作中の「町には昔から一つの組合があつた」ということの実証はインターネット情報で得たもので、この種のもが初めて役に立つた。実地踏査として二回、明石市に赴き、二回目の時は、「福谷」地区（今は神戸市）を歩いてみた。現在も竹藪が所々にあり、作中に「藪前の誰」という記述があるの

も領けたのだつた。時代設定の方は、小説の現在時はいつかを特定することに心がけて読んだ。作中に「流感」がやはり女主人公せきの姑親が亡くなり「その時から今に三年経つ」とあつて、明石市史によればこの地方に流行感冒が猛威をふるつたのは大正八年で、それから三年なら大正十一年ということになつた。大正十一年の九月一日には関東大震災があり、この年の秋に東京から有名な文学者が地方の都市に講演に赴くことなど考えられないのである。

明治大学の文学部紀要である『文芸研究』に論文を発表した場合、抜き刷りをいただけける。それを主な日本近代文学研究者たちに送つた。幸いなことに、二〇名を超える方々から概ね好評といえる私信をいただき、手応えありと感じていた。ところが、二〇一六年の年末になつて、Xさんという読み巧者と思つている方から、私の論文はとりわけ後半だが、マイケル・ファーパー著の『文学シンボル事典』や北原保雄編の『明鏡国語辞典』などを使っては読み方としては駄目ではないか、また田山花袋のいう「サンボリズム」（花袋の時評文の原文のまま引用したのだが、Xさんから副題に用いるなら「サンボリズム」とすべきだと指摘され、その通りだ」とご教示い

ただいた)を考えるなら相馬庸郎の『日本自然主義論』(八木書店、一九七〇)に所収されている「日本自然主義の「象徴派」的性情」を読んでもたらどうかというアドバイスをいただいたのである。この著書は昔購入しており、さして熟読していなかったが、早速当該の章を読んでもみた。メーテルリンクの戯曲からの「コントラストの技法」を日本自然主義の「象徴派」的性情として捉えていると読んだ。が、対照描法こそ志賀の得意とするところで「暗夜行路」や「城の崎にて」などにそれは指摘できることである。「雨蛙」なら賛次郎せき夫婦と竹野夫婦、劇作家のSと小説家のG、賛次郎がせきをA市に迎えに行く往路と復路、これらに「コントラストの技法」は見られる。だが、論文の余滴に花袋の志賀の小品「鶴」の批評を引用したのはいささか軽率だったかもしれない。ともあれ、志賀文学における「サンボリスム」の問題は今後の研究の大きな課題として残った。

さて、「雨蛙」を解読するというタイトルにしたのは、精読を一步踏み超え、私としては一種の冒険をしたつもりなのである。「雨蛙」を何度も読むと、「なぜ」が幾つも私の頭の中に去来した。正宗白鳥の評を志賀は、「没分曉漢の評」ではないとしている。「没分曉漢」にはル

ビが付けられているが、ルビなしで正しく読めるだろうか。テレビのクイズ番組で林修先生に聞いてみたいものだ。「わからずや」と読むのである。志賀はかなり漢字に関する知識が深かったのではなからうか。で、なぜ女主人公せきは平仮名で表記され常に傍点が付されているのだろうかと考えた。四九ヶ所に及ぶのだ。先行研究の一つに「関所」の「関」を読む見解があり、物語の展開のうえで重要かつ首肯できるものと思った。が、自伝的小説「大津順吉」を読めば、志賀が「百人首」を得意としていたらしいことが分かる。となれば、掛詞の技法を用いたとも思え「せき」はその文脈で「赤」にも「痕」にも「堰」にも通ずる象徴的意味合いが含意されていたのではないかと読んだのである。また、賛次郎の造り酒屋の屋号がなぜ「美濃屋」なのかと考えた。日町の住民が「大方土着の旧家」としても岐阜県的美濃、そこに「関」を考え合わせると、不破関が連想され、不破は不和に通じてしまうのである。また、友人竹野の水菓子屋(果物屋)を営むという設定に、果物の中でも「林檎」が重要な役割を持っていると思われ、私はギリシア神話の「黄金のリンゴ」「不和のリンゴ」説を採った。それになぜ「稲子」の群れが飛び立ち「稲子」の一疋が「せ

き」の肩に止まらねばならないのか。このシーンにも象徴性があると思えたのである。ともあれ、恩恵的で平穩に思われた日町からA市に行きGと姦通事件を起こして再び日町に帰還した「せき」は、電柱の窪みに住まう夫婦ものらしい二疋の雨蛙（日町における賛次郎せき夫婦と重なる）に賛次郎とは異なって何の関心も示さなかったのである。大方の読者の希望的観測、「雨蛙」の場合、賛次郎せき夫婦は結局は仲睦まじい夫婦（私見で元々そうだったとは読めない論じたつもりである）に戻ると読むことに私は賛同できないとしたのであった。

あらゆる学問、研究は仮説から成り立つ。後世で自説が新しいものに更新されるのが宿命としても、いまを精一杯努力することが肝要ではないのか。私は個人的には「文学」研究の醍醐味は古今東西の「文学」作品をいかに読み込むか（いまや専門化細分化され狭い範囲のものにしかその労力を費やせないが）にあると思っている。が、「文学」の読みは多様であり、その研究は実に曖昧なものである。自説の押売り行為は傲慢であり慎むべきであろう。そういう「文学」研究は世の中に果たして役に立つのかどうか。「文学」は実学ではないのでおそらくは役に立たないだろう。とはいえ、「文学」は一個人

のことから社会、人類全体へ、さまざまな思想、宗教のことなども内包させていて実に広汎なものを持っている。「文学」を読む人、研究に関わる人が増えれば増えるほど、グローバル化した今日の世界（これが雲行きの怪しいものになったのが二〇一七年の始まりであったといえよう）はいつの日か一つになれるかもしれない。高遠な考えかもしれないが、私は「文学」の力を信じていきたい。